

コミュニケーション促進システムとしての ボーイスカウト

—— 班制度におけるコミュニケーションを中心として ——

黒澤 岳 博⁽¹⁾

要 旨

本稿は、ボーイスカウトにおける諸原理のうち、班制度がコミュニケーションの諸原理に起因していることを確認する。

ボーイスカウトにおいては、その所属する小学校6年生から中学生は「ボーイスカウト隊」に配属され、異年齢による6～8人で「班」を構成する。この班というグループにおいて、青少年達がどのような意図から指導を受け、青少年同士のコミュニケーションを成立させていくのか、また、青少年を集団運営に参画させるためにどのような手法を取っているのかを制度上から読み解く。これらを確認していく中で、班というグループによりコミュニケーションを促進していくことが、ボーイスカウトなどの青少年育成にどのような意味を持つのかを検討する。

キーワード：ボーイスカウト，コミュニケーション，班，青少年育成

1. 第14回日本ジャンボリーと中学生の「あいさつ」

2006年夏、石川県珠洲市で、4年に一度開催されるボーイスカウトの全国大会「第14回日本ジャンボリー」⁽²⁾が開催された。合計22,000人が1週間のテント生活を行うこの大会では、毎日会場のあちこちで「こんにちは」と中学生が声を掛け合っていた。「ボーイスカウトである」「同じキャンプ大会に参加している」以外には共通部分を持たない中学生13,000人は、特にためらいもなく、すれ違う参加者同士であいさつをしていく。会場のメインストリートには、キャンプ生活を行う中学生が行き交っていることから「こんにちは」「こんにちは」と言い続けなければならない状況であった。

ところで、街中での「あいさつ」は、現状ではどうも難しいことになってしまっているようである。たとえば、埼玉県では、平成13年に彩の国教育改革会議が設置され、本県教育の在り方について「彩の国教育改革会議の提言」⁽³⁾がとりまとめられているが、この中で次のような提言項目がある。

大きな声であいさつのできる子どもを育てる

家庭では、礼儀の中でも最も基本である「あいさつ」を大きな声でできる子どもを育てるとともに、親自身が率先して子どもや近所にあいさつをするなど、地域ぐるみで「あいさつ運動」に取り組む必要がある。

また、この提言を基礎とした「彩の国教育改革アクションプラン」でも「あいさつ運動」については具体策として引き継がれている。これは埼玉県独特のことではなく、各県・市町村の教育委員会・青少年施策担当課のホームページで同様の「あいさつ運動」に関する記述が散見される。行政施策の一つとして「あいさつ運動」を推進しなければ、街中でのあいさつは行われなくなっているということになる。地域におけるコミュニケーションのきっかけとして、行政が「あいさつ」を励行しなければならない現代において、第14回日本ジャンボリーにおける「あいさつがとぎれない」状況はとても特殊なものであることが推察される。

1-1 ボーイスカウト運動における青少年教育の諸原理とコミュニケーション

イギリスで始まったボーイスカウト運動⁽⁴⁾は今年創始100周年を迎える。現在では世界216の国と地域で2,800万人を越す世界最大の青少年教育運動として発展している。世界スカウト事務局の事務総長を務めたラズロ・ナジは、ボーイスカウト運動の創始者であるベーデン・パウエル(1857~1941)が「スカウティング・フォア・ボーイズ」⁽⁵⁾を刊行することで青少年自身に直接語りかけたことがこの運動の成功の要因である⁽⁶⁾と論じている。しかし、刊行以来100年を経ていることから「スカウティング・フォア・ボーイズ」が現在も直接青少年に語りかけていると言うには、状況の変化があまりに大きいと感じざるを得ない。また、現状の日本では、すべてのボーイスカウトが「スカウティング・フォア・ボーイズ」を読んでいるとは言い難い。

したがって、現状におけるボーイスカウトの魅力として「ベーデン・パウエルが直接語りかけること」に変わる大きな要因が存在するはずである。ボーイスカウト運動ではその卓越した教育方法に加え、地域の熱意ある成人が指導者として青少年に安全な活動を提供してきた歴史を持つ。成人指導者が青少年と接していくことから、青少年間、青少年一成人間、成人間等の接点が生まれる。これらの接点における「コミュニケーション」が「ベーデン・パウエルが直接語りかける

こと」の代わりとなっていることは容易に想定されることである。

1-2 本稿の目的

ボーイスカウト運動には、その教育方法として特色づけられるものとして、「班制度（パトロール・システム）」と「進歩制度（バッヂ・システム）」、「ウッドクラフト（森林生活法）つまり野外活動」や「制服などを用いたアイテム」などがある。本稿ではこれらボーイスカウトの教育方法のうち、青少年たちが自らコミュニケーションについて意識せざるを得ないものであり、また、もっともコミュニケーションをストレートに体现している制度であると思われることから、まず「班制度」をとりあげ、この「班制度」がコミュニケーションの諸原理に起因していることを確認していきたい。これ以外の教育方法については、今後検討を行っていきたい。

本稿での検討手法としては、まず、「班制度」に関して、日本で行われている現状の「制度」を、ボーイスカウト日本連盟の教育規定等から確認したあと、班制度に関するいくつかの言説に注目する。そして、「班制度」「コミュニケーション」をキーワードとしてこれら諸言説を読み解き、振り返ってボーイスカウトのコミュニケーション促進機能の一端を明らかにしていきたい。

1-3 本稿におけるコミュニケーション

コミュニケーションに関する定義は、大多数を得られるようなはっきりと明確なものが示されていないと言うのが現状である。これは、コミュニケーションが幅広い意味を持つことから、一つの定義を選び出すことはあまり意味を持たないことによる。

宮原（2006）では「コミュニケーション・コンピテンスの習得、発展を目的」として「人間がシンボル（言語・非言語）で作ったメッセージを交換し合い、お互いを影響し合う過程」と定義している⁽⁷⁾。本稿ではさしあたりこの定義を採用し、宮原（2006）の説明に沿って次のような特徴を持つものであることを確認していきたい⁽⁸⁾。

- a. コミュニケーションは人間が対象
- b. メッセージはシンボルで構成される
- c. コミュニケーションは不可避で、連続的
- d. コミュニケーションはコンテキストに影響される
- e. メッセージには内容面と関係面がある
- f. コミュニケーションを通して「個」ができる

上記の特徴それぞれの詳細についてここでは解説しないが、特に上記 a については、人間だけが参加するボーイスカウトにおいては当然のことであるので、今後も触れることはない。本稿では、これらの特徴をベースにおいて議論を進めていきたい。

2. 班制度における「班」について

まず、ボーイスカウトの「班制度」について、その外観を教育規定等から確認し、それらをコミュニケーションの視点から検討する。

2-1 ボーイスカウトの「班」

ボーイスカウトにおいては、その所属する小学校6年生から中学生（以下「スカウト」）は「ボーイスカウト隊（以下BS隊）」に配属され、異年齢の6～8人で「班」を構成する。そして、BS隊にはこの班がいくつか設置されることになる⁽⁹⁾。

この班の中で、スカウト達は「班長」「次長」「記録係」「備品係」「会計係」などの役割分担を行い、班を自主的に運営していく。この班は成人指導者が管理しやすいように編成したグループではなく、スカウト一人一人を信頼し、班運営を任せることで、彼らが自ら社会人としての資質、たとえば、責任感・指導性・協調性・自信といったものを発達させることを期待⁽¹⁰⁾しているものである。

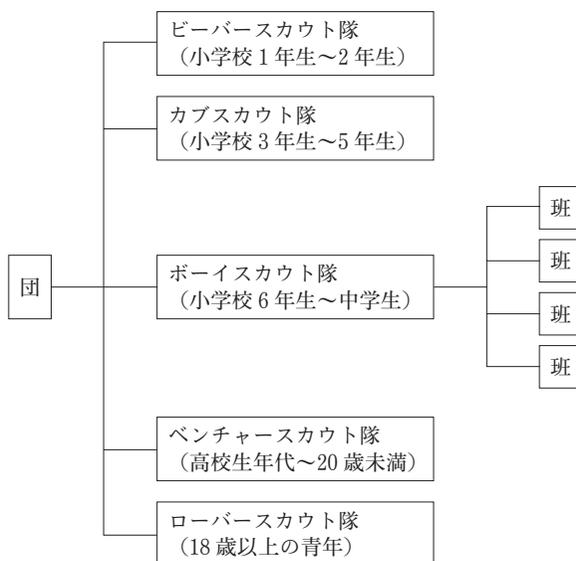


図1 団における隊の立場と班の位置

2-2 教育規定上の「班」

ボーイスカウト教育の基本的事項を定めたボーイスカウト日本連盟の「教育規定」では、BS

隊の班について次のように定めている⁽¹¹⁾。

基本方針における班制度（班制教育）

1-2 基本方針

ボーイスカウト運動（以下「本運動」という）は、ちかいとおきての実践を基盤とし、ペーデン・パウエルの提唱する班制教育と、各種進歩制度と野外活動を、幼年期より青年期にわたる各年齢層に適応するように、ビーバースカウト、カブスカウト、ボーイスカウト、ベンチャースカウト及びローバースカウトに分け、成人指導者の協力によってそれぞれに即し、しかも一貫したプログラムに基づいて教育することを基本方針とする。

「1-2 基本方針」で示されているとおり、ボーイスカウト運動では班制度（班制教育）は、発足当時から続くアイデアとして現状でも欠かすことができない制度であり、各年齢層にあわせて班制度を適用させていくこととなっている。本稿では、すべての年齢層の基礎として定められているBS隊の班制度のみを検討するが、ビーバースカウト、カブスカウト、ベンチャースカウトなどでもBS隊の班制度を年齢にあわせて実践するような運用が行われている。

ボーイスカウトは、組織として発足する前に、スカウティング・フォア・ボーイズを読んだ少年たちが自発的に班を作り活動をはじめたとされているが、このスカウティング・フォア・ボーイズで記述されている「班（パトロール）」と現在の班は、少なくとも制度上は変わらない形を取っている。

班長の任命と任務、班の運営

6-88 班長の任命

班長は、班員によって選ばれた者を班長会議にはかった上、隊長が任命する。

6-89 任務

班長は、次長の協力と班長会議及び隊長の助言によって、班の集会、ハイク、キャンプ等の活動を計画し、隊及び班活動をとおしてその班員を指導する。

6-90 次長

次長は、班長会議及び隊長の承認を得て班長が選任する。次長は、班長を助け班長不在の場合その代理をする。

6-94

班の運営はすべて班会議において、合議決定することを奨励する。

- 2 班会議は定例及び随時に開かれ、班長が座長となる。
- 3 班長は班会議の決定事項を隊長に報告する。

班長は6~8人のスカウトのグループの「リーダー」として、班を運営する責任を持つ。BS隊では15歳（中学3年）が最高年齢となるが、班の運営のために次のような点について責任を持つように指導され、「班長の仕事」として以下のような点が上げられている⁽¹²⁾。

- ・班員それぞれの能力を引き出しながら班を導く。
- ・各自の希望が反映されるよう、みんなの意見に耳を傾けて班活動計画を立てられるようにする。
- ・仕事を分担して班員一人ひとりがリーダーシップをとれるようにする。
- ・班としての目標を定め、それを達成できるようにする。
- ・班員の進歩状況を把握し、それぞれの挑戦に手を貸す。
- ・班の意見を代表して班長会議で述べ、班長会議の結果を班員に周知する。
- ・班の仲間と共に班を率いて隊活動に参加する。

2-3 コミュニケーションの特徴からとらえた「班」

上記のような「班制度」を1-2で定義したコミュニケーションの特徴から、それぞれ確認していきたい。

b. メッセージはシンボルで構成される

宮原（2006）は「人間のコミュニケーションは、シンボル活動である」とする。また、「シンボル（象徴）は他のものを代表する記号で、シンボルそのものが意味を備えているのではなく、それを使う人間が恣意的に意味を当てはめ、交換、共有するために用いる道具である」とする⁽¹³⁾。コミュニケーションは、言語シンボル・非言語シンボルなどを利用して行われるわけであるが、ボーイスカウトの中では、たとえば「キャンプ生活での班長と備品係の会話」などでメッセージの交換が行われることになる。

ボーイスカウトの活動は、生活やゲームなどすべて班を単位として行われる。この活動の中で班長を中心に、班に属するスカウト同士の会話が行われるとともに、より多くの話し合いが行われるよう指導者も班長にアドバイスをする。

c. コミュニケーションは不可避で、連続的

コミュニケーションの特徴の一つとして「嫌いな人から電話がかかってきても出ない、メールが来ても返事をしないことによってコミュニケーションを絶っている、と考えられるが、相手からのメッセージを無視すること自体、一つのメッセージを送っている」⁽¹⁴⁾と言った例を挙げることができる。メッセージの送り手が意図していないことでも、またはメッセージを送っていなくても、相手がメッセージとして受け取ってしまった場合、コミュニケーションが成立してしまうことになる。

「班制度」においては、班集会・班会議など「スカウトだけで運営される班の活動」を通してコミュニケーションが行われることが多いが、班長はそれぞれのスカウトに対する情報提供、情報収集の際、次のようなことに注意するよう指導を受ける⁽¹⁵⁾。

キミが情報を与えるときには、

- 他の者が聞きたがっていることは何かを確かめること
- ゆっくりと明確に話すこと
- もしできるならば、図表や写真を使ったりすること
- 適切な言葉を使ってメンバーを十分に元気づけること
- すべてが理解できているかを確かめるために、質問してみること

キミが情報を受け取るときには、

- 細心の注意をはらうこと
- 適切な言葉を使うこと
- 情報の中から、意図されたものを読み取ること
- 質問して尋ね、キミの理解に間違いがないかを確かめること
- キミが十分に理解できるまで、その場を離れないこと

中学生である班長に対して、このようなことに注意しながら班員とのコミュニケーションを求めているわけであるが、これらにより「意図しないメッセージ」が相手に届かないように注意を喚起している。

d. コミュニケーションはコンテキストに影響される

背景・状況（コンテキスト）により、メッセージの受け手は意味を読み違えることがある。ボーイスカウトの班では、中学3年生の班長と小学校6年生の班員で年齢差や中学校と小学校の学習・

生活環境の差（たとえば、クラブ活動等の先輩・後輩の違いなど）により意図しないメッセージの読み取りを行うことがよくあることから、班長に対して、上記cで指摘されているような情報提供、情報収集の注意点を示されている。

e. メッセージには内容面と関係面がある

先輩と後輩の関係性により、実際のメッセージの内容とは別の部分でメッセージが伝えられることがある。たとえば「先輩がなにを言っても後輩にとっては恐怖の対象となる」ことなどであるが、ボーイスカウトでは、班長に対して「すべてに公正であれ」と言った指導が行われる。すべてを平等にとらえるのではなく、しかし年齢等の関係性によって態度を変えるなどのことはしないように、班長が班のメンバー一人ひとりをしっかりとらえ、興味などに従って責任を割り当てるよう試みるのが指導されている⁽¹⁶⁾。

f. コミュニケーションを通して「個」ができる

他者とのコミュニケーションの中から「個の確立」が行われるという議論がある⁽¹⁷⁾。この「相互依存的自己観」の確立は、ボーイスカウトの班においては特に重要視されている。たとえば、班長は「班員について知ること」を指導され、「班のメンバーに興味を持ち、彼らをよく知ること」で班員を手助けして、「リードすることができる」⁽¹⁸⁾等の記述がある。

班長への指導

これら、ボーイスカウトにおけるコミュニケーションの諸特徴については、「班長と班員」の間で行われることが多いため、指導は主に「班長」に向けて行われることが多い。もちろん「隊」の中の隊員としての「班員」に対しても指導者は指導するわけだが、指導の多くは「班長」に対して行われ、班長を通じて班員に伝わっていくことになる。したがって、ボーイスカウト教育においては「班長」がとても重要な要素であり、コミュニケーションについては「班長」を中心として行われている。

2-4 人間関係発展のコミュニケーションから見た「班」

宮原（2006）は、人間関係発展のコミュニケーションとして、①出会いの段階、②探り合いの段階、③関係強化の段階、④統合の段階、⑤結束の段階と分けている⁽¹⁹⁾。

ボーイスカウトの班においては、参加するスカウト達の関係性として「①出会いの段階」「②探り合いの段階」を、新規発足の団以外では「新入班員と班の先輩」として迎えることになる。小学校5年生のカブスカウトから上進して、各班に配属される時がこの2段階に該当することに

なるが、たいていの場合、カブスカウトでも同じような先輩・後輩の関係であったことがあるため、自分と相手とのこれからの関係を探り合う②の段階はすでに終えていることが多い。

そして、キャンプ・ハイキングなどにおいて、班を中心として活動を行っていく中で「③関係強化の段階」「④統合の段階」「⑤結束の段階」になるように指導される。班の中での役割分担は当然であるが、班員それぞれの思考や意見が班の運営にしっかり反映されるよう、班長は隊指導者から指導を受ける⁽²⁰⁾。このような過程を経て、「共に活動する仲間」として、班の結束は強くなっていく。

宮原（2006）は関係強化の例として「たとえば職場などでも、最初はぎこちない人間関係が、共通の目標、スペースの共有、会社のスローガン、あるいは制服などにも助けられて親密な相互依存の関係が生まれる」としているが、班制度においては同様の環境が、参加当初から整えられている。

また、深田（2005）は「⑤結束の段階」の例として「指輪やおそろいの服装などの非言語的なコミュニケーションも大切な役割を果たす」と解説する⁽²¹⁾が、もとよりボーイスカウトは制服を着て仲間意識を高めているだけでなく、各班ごとに「班別章」を決め、班としての統一感を制服にも表している。さらに班独自の呼び声である「班呼」、班の歌である「班歌」、班のシンボルとなる「班旗」等を定め、班の中での仲間意識を強めるような環境を整えている。



写真1 班別章の例

これらの状況を考えてもわかるとおり、ボーイスカウトでは、人間関係発展のプロセスを「かけあがる」ことができるような環境を整えており、班の活動に参加するスカウト達が、より活発なコミュニケーションを図ることができるようになっている。

2-5 小集団のコミュニケーションから見た「班」

また、宮原（2006）は、コミュニケーションの視点から見た小集団について、①われわれ意識、②グループ規範、③豊富な情報源、④相乗効果、⑤時間と忍耐が必要、という特徴をあげる⁽²²⁾。

ボーイスカウトの班制度をこの5点についてそれぞれ検討してみたい。

まず、「①われわれ意識」を高めるため、班の仲間意識を高めるような指導が班長以下班員に対して行われる。また、班のシンボルを描いた「班旗」を作成することなども奨励される。BS隊の活動で行われるプログラムも「班の協調性」を高めるようなものが選ばれ、たとえば、先ほどの班旗を利用して、ロープと棒を利用し、どの班が早く班旗を立てることができるかを競う「班旗立てゲーム」と言ったプログラムも行われる。班の役割分担を明確にし、班全体が協力することが求められるようなプログラムとなっている。



写真2 班旗立てゲームの様子

また、「②グループ規範」に関しては、ボーイスカウト全体としての規範として「ちかい」と「おきて」が定められている以外に、班員全体が仲間となって目標に向かって活動ができるように「班精神」「班のモットー」を言葉にして定めるよう班長に対して指導が行われる。

「③豊富な情報源」としては、上記でも指摘されているように「班員のニーズをつかむこと」「班の意見を代表すること」「班員に班長会議の結果を周知すること」等が指導され、「④相乗効果」については「仕事を分担」することで、班全体でリーダーシップを発揮できるような意識を班長が持つように指導されている。

「⑤時間と忍耐が必要」としては、班長に対して「それぞれの能力を引き出し」「各自の希望が反映されるよう」指導が行われている。

中学生の班長に対して、ボーイスカウトは上記のようなことを責任持って実行し、班を運営することも求めている。これらの内容は、社会人のグループマネジメント等で必要とされるコミュニケーションと同様のものとなっており⁽²⁵⁾、ボーイスカウトがスカウト同士のコミュニケーションを重視し、班長をはじめとするスカウトに対して、それぞれ細かな指導をしていることがわかる。

3. 隊を運営する班長会議

班がスカウトによって運営されるのと同様に、ボーイスカウトではBS隊そのものも班長をはじめとしたスカウトにより運営される。

3-1 教育規定に見る班長会議

6-92 班長会議

班長会議は、班長、上級班長⁽²⁴⁾及び隊付⁽²⁵⁾をもって構成し、上級班長がその座長となる。

2 上級班長は、必要に応じて、次長を出席させることができる。上級班長が欠員又は不在の場合は、前任班長がこれに代わる。

3 隊長または副長は、助言者としてこの会議に出席する。

6-93

班長会議は、班長教育の一方法であるとともに、隊の名誉を保つこと、隊員の進歩に関すること、隊活動のプログラムを立案準備すること、隊内運営に関することについて責任を有する。

BS隊では、スカウト達の代表である班長、上級班長、隊付が班長会議で合議し、隊の運営を行う。具体的な毎月のプログラムでは、隊長が安全確保のためにサポートすることもあるが、原則としてスカウトが意思決定を行うこととなっている。班長会議のメンバーは、以下のような点⁽²⁶⁾について責任を持つよう指導されている。

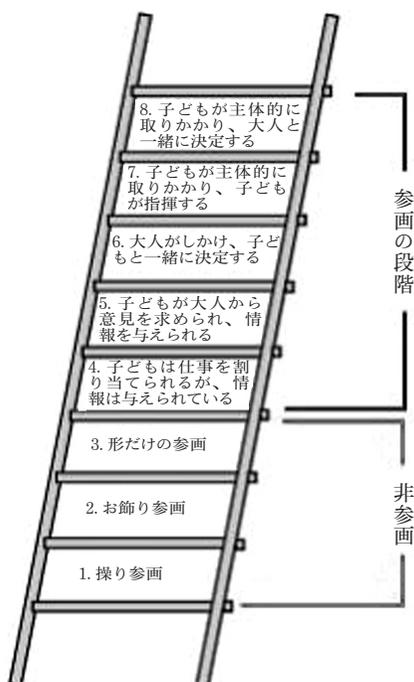
- ・ちかいとおきてを実践し、他のスカウトの模範となるようつとめます。
- ・隊の「名誉」、「伝統」を大切にします。
- ・自分の希望より模範の希望を優先します。
- ・公平な判断をします。
- ・みんなの意見で決めたことを守ります。
- ・隊の運営に積極的に参加し、隊長を助けます。
- ・会議の内容によっては、秘密を守ります。

班長会議は隊を運営していくための「機能」であると共に、班長たちにとって、自分たちの班

を代表して民主的に物事を決め、実行していく準備をする「学習の場」でもあるように指導者が配慮することになっている⁽²⁷⁾。

班長会議で、班長同士または班長と上級班長、隊付のコミュニケーションのために、中学生にこのようなことを指導するのは、基本的に班を中心として、BS 隊の運営に「参画」してもらうことを意図しているからである。

ハート（2000）は、青少年の意思決定に関する参画について「参画のはしご」というモデルを示している。この「はしご」は大人と子どもと一緒にプロジェクトを行う際、子どもの自発性・主体性と協同性を「はしごの段」で示しているもので、はしごの上段にいくほどに子どもが主体的に関わる程度が上がるような表現となっている。



出典：ロジャーハート（2000）

図2 「参画のはしご」

ボーイスカウトの班制度では、スカウト達がこのはしごの7段目から8段目に当たるようになるため、班長に対して班員とのコミュニケーションをうまく作っていくように指導していると同時に、班長会議においても民主的な運営を体験させ、青少年の意思決定への参画を実現できるようにしている。

4. ボーイスカウトの班に関する言説

班制度は、社会教育においては、様々な評価を受けている。

たとえば、ヘルンレ（1972）はボーイスカウト教育を「方法は革命的だ」とまで評価しているが、班制度は「集団の形成」と一言で触れている程度であり、クループスカヤ（1991）も班制度については重きを置いていない⁽²⁸⁾。

また、ラズロ・ナジ（1989）は、「青少年に対するベーデン・パウエルの直接の語りかけ」以外に、ボーイスカウトの成功の要因として、ボーイスカウト運動特有の方法論を次の通り示している⁽²⁹⁾。

- ① 遊び（ゲーム）—— 子どもが発見と修行を行う自然な方法
- ② 班 —— 若者達の小共同体。決定と行動と助け合いの場
- ③ 隊 —— 共同管理と民主主義の修行を可能にする、より大きい共同体
- ④ キャンプと自然の中での生活 —— 自由な空間、現実と立ち向かうに最適な場
- ⑤ 「おきて」と「ちかい」 —— 束縛されず自発的に約束を守る機会。自己超越と精神的開花への呼びかけ
- ⑥ 自己教育 —— 自立と責任を養う一つの過程
- ⑦ 神話 —— 平和と世界兄弟愛という理想の建設者としてのボーイスカウト運動の神話
- ⑧ シンボル —— 所属の印としての、制服、記章、標章。

このうち、「②班」については以下のとおり述べている⁽³⁰⁾。

班は第一の要素であり、ボーイスカウト活動の基本単位であって、決して隊の下位区分などではない。この小グループは大幅な自律性を備え、他の班員よりほんのわずか年上の少年が務める班長の指揮の下、決定を下し、組織的に行動することができる。

班は目的もなく、大人の干渉も受けず組織された集団ではないし、年長者の指示に導かれ、引きずり回される子供の群れでもない。少年がチームに関する基本的な知識を自分で手に入れ、班員が共有する連帯と労働と喜びと失望について、最初の授業を受ける社会的な基本単位である。班では、常になにもかもうまくいくとは限らない。緊張もあれば失敗もある。しかし、それで良いのだ。班は人生の良き修行期間なのである。班は責任感や奉仕と他者の尊重の精神を養うが、それぞれ特徴や個性を持っている。しかし、その班員たちが孤立してし

まうような、他から切り離された集団では全くない。

さらに、自らの研究結果として、ボーイスカウトの創始者ベーデン・パウエル（注）の班制度に対する次のような評価を続ける。

〈スカウティング・フォア・ボーイズ〉の後期の版の一つで、ベーデン・パウエルは、それ以前の版では、班制度や《名誉会議》（訳注：班長会議のこと）の価値がやや軽く扱われすぎたきらいがあると、不満を述べていた。彼はそこで、「これは、われわれの教育方法が他の諸団体の教育方法と異なる、本質的な特徴である。班制度が正しく実行されるならば、必ずや絶対に成功に至るであろう」と言っている。

これらの評価は、どれも班制度における「コミュニケーションの視点」が語られていない。「班という小集団の人数」や「班の中での協力」と言った点についての言及・評価のみであり、具体的に「隊指導者とスカウト」「班長と班員」「班員同士」などの「関わり＝コミュニケーション」といった点については触れていない。このため、班制度の具体的な成果である「グループの中でのスカウトの成長」については、言及することができずにいる。

5. グループワークと班制度

戦後の青少年教育において、もっとも影響力があったのがグループワーク理論であり、ボーイスカウトの班制度はその実践の中でグループワーク理論の基礎を築きあげてきた⁽³¹⁾。また、戦後日本においては、GHQ/SCAP（連合軍最高司令官総司令部）占領時の教育政策において、社会教育の分野で日本の民主化のためにグループワークが導入されたという経緯があるが、ボーイスカウトにとっては戦前からなじみの深いものであるため、その受け入れに特に抵抗がなかったとされている。

前章において確認したとおり、教育制度としてのボーイスカウトは社会教育の分野で注目を受けてきたが、それらの多くは「ボーイスカウト運用の制度」であった。結果、特に班制度に関しては、具体的に青少年＝スカウトが「どのように活動し、そこで得たものを社会においてどのように活用しているか」は、触れられてこなかったように思われる。

田中（1995）は、6～8人の青少年で編成される「班制度」こそボーイスカウト運動が20世紀の青少年教育界に残した最大の遺産であると評する。そして、子どもたちの自発的な仲間集団（ピアグループ）を利用して間接的に大人の指導を加える小集団指導法である班制度は、後に米

国において「グループワーク」として理論化されたとしている⁽³²⁾。また、田中（2003）では、「結局、日本においてグループワークは『集団づくりの技術』として理解され利用された感がある」とこれまでのグループワークに対する評価を加えると共に、グループワークの発展型として「参加型ワークショップ」を紹介する。

そして、参加型ワークショップにおいてリーダーシップを取る「ファシリテーター」の役割をハートの言葉を借りて説明していく。ここで紹介されているファシリテーターは「子どもの参画を促す大人が任うべき新しい役割」として次のような役割を持つ。

- ・知識を伝える人として働くのではなく、子どもが自分たちで活動できるように舞台を整え、そのことによって子どもたちを助ける人
- ・子どもが自分自身で問題を発見し、その答えを見つけ出すようにする
- ・子どもが参画するようになったら、子どもの話を聞く、子どもを支える、必要なときには相談に乗るなど今までとは違った役割へとどうやってその関わりを変えていくかが重要

これらは、ファシリテーターたる成人が、子どもとのコミュニケーションを続けていく中から必要となってくる役割を説明しているものであるが、班制度において班長に求められている事項とほぼ一致することがわかる。ボーイスカウトでは、スカウトである班長に対し、「ファシリテーター」としての役割を求めていることになる。また、この役割を担うためには、各人間のコミュニケーションが重要になることが明白である。

6. 終わりに

—コミュニケーション促進システムとしての「班制度」—

本稿では、ボーイスカウトの特徴の一つの「班制度」について、現行制度を確認すると共にコミュニケーションの視点から検討を試みたが、これまでコミュニケーションに関する検討は、ボーイスカウト活動の実践の中ではあまり言及されてこなかった。ボーイスカウト運動が100年目を迎え、国内でも18万人の加盟員を持つ巨大な組織の中では、スカウト教育最前線である各隊指導者とスカウトのコミュニケーションを保つことよりも、組織としての「形」を整えることで手一杯と言うことなのかもしれない。しかしながら、1983年の33万人をピークとして、毎年加盟員が減少を続けていることがその結果であるならば、早急に改善を考えていかなければならないはずである。

本来、青少年育成の観点からスカウトを見れば、ボーイスカウトの諸制度をどのように運用し

ていくかよりも、むしろ、「どのようにスカウトが成長するのか」をしっかりと評価し、そのためにスカウトに対しどのような指導を行っていくのかを検討することが重要である。班制度についていえば「小集団を形成し、協力する」ためのものという、いわゆる「制度設計・運用」に関する部分よりも、班内のスカウト同士がよりよい関わりを持つために「コミュニケーションを促進する」ことの方が重要視されるべきである。

ボーイスカウトの班制度が本来あるべき姿の「コミュニケーション促進」として捉え直すことが現実的なものとなれば、ボーイスカウトがこれまで全国各地で長年にわたって行ってきた実践は、そのまま「子どもの参画」に関する知見として活用できるはずであると考えられる。また、全国18万人が参加して行われている日々のボーイスカウト活動は、地域社会における「子どもの居場所」づくりにも大きな影響を与えることが可能となるはずである。

今後、ボーイスカウトの班制度に関する実際の運用から「進歩制度（バッジ・システム）」、「ウッドクラフト（森林生活法）つまり野外活動」や「制服などを用いたアイテム」等についても、コミュニケーションの視点から検討していきたいと考えているが、これらがきっかけとなり、ボーイスカウトにおける個人間のコミュニケーション手法の見直しが行われ、「ボーイスカウト教育現場の活動」がより円滑に進み、地域社会のコミュニケーションの更なる発展に寄与することにつながれば幸いである。

〈注〉

- (1) 城西大学経営学部非常勤講師。ボーイスカウト埼玉県連盟三郷第1団にて団委員・高校生の指導を行うほか、ボーイスカウト埼玉県連盟広報特別委員会副委員長として、公式WEBサイトの管理を行っている。第14回日本ジャンボリーには、参加する中学生の国際交流を促進する担当としてスタッフ参加した。
- (2) 第14回日本ジャンボリーについては、次のサイトに詳細が掲載されている。<http://www.14nj.org/>
- (3) 提言の詳細については次のサイトを参照。 <http://www.pref.saitama.lg.jp/A20/BA00/kaikaku/teigen2.html>
- (4) 世界スカウト運動創始100周年に関する概要については、次のサイトに詳細が掲載されている。<http://www.scout.or.jp/j/info/pr/100nen.html>
- (5) 1907年、ベーデン・パウエルが自らの体験を基に書いたもの。スカウティング・フォア・ボーイズとは「少年のための斥候術」といった意味で、発行当時は六分冊の冊子として発行され、後に一冊にまとめられた。この本がイギリス中で評判になり、本を読んだ少年たちは自発的に組織（パトロール/班）を形成し、自ら活動を行った。これがボーイスカウト運動の原点・発祥とされている。
- (6) ラズロ・ナジ (1989), p.170
- (7) 宮原 (2006), p.28
- (8) 宮原 (2006), pp.28-35
- (9) 8人の班が4つ集まり、32人の隊が「標準隊」と呼ばれ、運営上最適な規模とされている。
- (10) 勸ボーイスカウト日本連盟 (2005a), p.23

- (11) 以下、条文については(勸)ボーイスカウト日本連盟 (2005b)。なお、この規定集には、(勸)ボーイスカウト日本連盟の寄付行為及び教育規定が掲載されている。このうち教育規定は、全国各団でボーイスカウト教育を行う際、必要となる基本的事項が条文として掲載されている。
- また、この教育規定では「1-2」と言った表記になっているが、これは「第1章第2項」を意味する。本稿では教育規定に合わせた表記を行う。
- (12) (勸)ボーイスカウト日本連盟 (2005a), p. 26
- (13) 宮原 (2006), p. 29
- (14) 宮原 (2006), p. 31
- (15) 日本ボーイスカウト京都連盟 (2005), p. 21
- (16) 日本ボーイスカウト京都連盟 (2005), p. 21
- (17) 宮川 (2006), p. 35 など
- (18) 日本ボーイスカウト京都連盟 (2005), p. 22
- (19) 宮原 (2006), p. 151
- (20) たとえば、班で行われる集会や会議について、日本ボーイスカウト京都連盟 (2005) では「成功する班集会運営のための7か条」を次のように紹介する (p. 28)。
1. 今日の目的をみんなで確認する。
 2. 他の人々のアイデア (この中には班員以外も含んでいる) を聴くこと
 3. それらのアイデアを提案させるチャンスをみんなに与えること
 4. 示されたことを具体的に書き出してみる
 5. 彼らにはどうかとキミが感じていても、他の人々のアイデアを拒絶してはいけない
 6. もしアイデアが冒険的すぎるなら、隊指導者のチェックが必要だと班に話す
 7. 起きたことを冷静に見つめ、行動の中で浮かび上がったことを確認する
- (21) 深田 (2005), p. 220
- (22) 宮原 (2006), p. 170
- (23) たとえば、古川久敬 (2004) や川島洸 (2002) には、グループのリーダーとして取るべきコミュニケーションとして、同様のことが記述されている。
- (24) 上級班長については、次の通り規定されている。
- 6-83 上級班長の任命
- 隊長は必要に応じ、班長会議にはかった上、上級班長を任命する。
- 2 上級班長は、18歳以下で指導力を有する1級以上のスカウトであることが必要であり、班長、次長として通算6か月以上の経験を有することが望ましい。
- 6-84 任務
- 上級班長は、隊長の指導のもとに隊活動の中心となり、また班長会議の座長となる。
- (25) 隊付についても次のような規定がある。
- 6-85 隊付の任命・資格
- 隊長は、必要に応じ、班長会議にはかった上、隊付を任命することができる。
- 2 隊付は、指導力を有する1級以上のスカウトでなければならない。
- 6-86 任務
- 隊付は、隊長より分担を命ぜられた特定の任務を行う。ただし、その任務に関する責任は隊長がこれを負う。
- (26) (勸)ボーイスカウト日本連盟 (2005a), p. 30
- (27) (勸)ボーイスカウト日本連盟 (2005a), p. 33
- (28) ヘルンレは、「スカウト隊長の教育は子どもを能動的にする」等の観点に重きを置き (ヘルンレ

(1972), p.100), クループスカヤは「少年少女がもう子どもではないこと」「目的の明確化」「遊びの要素」などに注目している(クループスカヤ(1991), p.84, p.90, p.92)。

(29) ラズロ・ナジ(1989), p.170

(30) ラズロ・ナジ(1989), p.172

(31) 田中治彦(1995), p.164

(32) 田中治彦(2003), p.197

参考文献

- 上平泰博・田中治彦・中島純共著(1996)“少年団の歴史——戦前のボーイスカウト・学校少年団——” 萌文社
- 川島 洵(2002)“1人でも部下・後輩を持った人のためのコミュニケーション力” すばる舎
- クループスカヤ(1991)“青少年の教育／伊集院俊隆・関啓子訳” 新読書社
- 田中治彦(1995)“ボーイスカウト——二〇世紀青少年運動の原型——” 中央公論社(中公新書1266)
- 田中治彦(2003)“居場所づくりの方法論 グループワークの限界と可能性” 子ども・若者の居場所の構想(学陽書房)
- 中島 豊(2000)“パトロールシステムの研究(1)——創始者ベーデン・パウエル of 構想と実践——” スカウティング研究第8号, pp.125-137
- 日本ボーイスカウト京都連盟(2006)“ボーイスカウトパトロールリーダー・ハンドブック” 日本ボーイスカウト京都連盟
- 萩原健次郎(2006)“現場は課題解決のアイデアと資源をもっている——3年間の「おてんばクラブ」のふりかえりから—— “ガールスカウト機関誌「OLAVE」第9号
- 深田博己(2005)“インターパーソナルコミュニケーション——対人コミュニケーションの心理学——” 北大路書房
- 古川久敬(2004)“チームマネジメント(日経文庫1006)” 日本経済新聞
- ヘルンレ(1972)“プロレタリア教育の根本問題” 明治図書
- 財団法人ボーイスカウト日本連盟(1982)“ボーイスカウト隊長ハンドブック” 財団法人ボーイスカウト日本連盟
- 財団法人ボーイスカウト日本連盟(2005a)“ボーイスカウト隊リーダーハンドブック” 財団法人ボーイスカウト日本連盟
- 財団法人ボーイスカウト日本連盟(2005b)“日本連盟規定集” 財団法人ボーイスカウト日本連盟
- 宮原哲(2006)“新版入門コミュニケーション論” 松柏社
- ラズロ・ナジ(1989)“2億5千万人のスカウト” 財団法人ボーイスカウト日本連盟
- E. E. レイノルズ(1988)“スカウト運動” 財団法人ボーイスカウト日本連盟
- ロジャー・ハート(2000)“子どもの参画——コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際” 萌文社

The Boy Scouts as a Communication Promotion System Communication in the “Patrol System”

Takehiro Kurosawa

Abstract

In this report, I will confirm that, among the many principles of the Boy Scouts, the principles of communication are the basis for the Patrol System.

In the Boy Scouts, boys aged 12 to 15 are assigned to a “Boy Scout troop”, then form Patrols of 6–8 people.

I will confirm with what intention they follow their leaders’ instructions and how communication between the youths is established, as well as what kind of techniques are used to let the scouts participate in group administration within the context of the Patrol System. I will also examine what kind of meaning promoting communication through the patrols has for the upbringing of young people such as Boy Scouts.

Keywords: Boy Scout, communication, patrol, young people upbringing